

駒林 誠先生を偲んで

1. 先生のご逝去

2020年6月1日に駒林 誠氏（以後「先生」という）が89歳でお亡くなりになりました。先生は東京大学・大学院、名古屋大学助教授を経て、気象大学校教授、気象庁観測部長、気象大学校長を歴任の後、財団法人（当時）日本気象協会（JWA）に所属されました。研究者であり、教育者であり、行政官であり、さらに国際協力機構（JICA）の専門家も経験された先生のお人柄と仕事振りには、各方面の方々が心を動かされました。ここでは有志により先生の業績と思い出を語ることにします。

2. 生い立ち

先生のご長男である駒林 徹さんによると、先生は1931年東京新宿生まれ、お父上は日本の航空業界草分けの駒林栄太郎氏（東京帝国大学から航空局、日本航空）であり、茨城県土浦中学校（現在の茨城県立土浦第一高等学校）在学中に筑波山の上を飛ぶ飛行機を見て育ったそうです。先生のお母さまの文代さんは名機「飛燕」を設計した土井武夫氏の妹さんです。徹さんが子供のときに先生に何か質問すると答えられないことはなかった、また70歳代の先生に徹さんが気象予報士の過去問題を出題してみたところ100点満点だったそうです。

3. 大学教員時代

1958年8月東京大学大学院数物系研究科地球物理学博士課程を中途退学後、同年9月東京大学理学部助手、1961年4月名古屋大学理学部助教授を経て1970年4月気象大学校教授とられました。

<元名古屋大学 石坂 隆>

先生は東京大学において磯野謙治教授のもとで、自然氷晶核・人工氷晶核・凝結核・氷晶の習性の研究に従事するとともに、当時水不足が深刻であった東京都の要請を受けて1958年から1961年まで東京都水道局人工降雨実験に貢献しました。また先生は、降水機構の



分野において雲物理学の日本における基礎づくりに努め、特にその中でも自然氷晶核の活性化能力と起源、氷晶の核形成、氷晶の結晶習性とその成長、凝結核の濃度と組成、巨大雲粒の形成及び降水機構の微物理学的過程に関する研究の成果に見るべきものがあります。1961年には、温かい雨に関する研究において、雨滴の大きなものと小さいものでは塩分濃度が高いが、中粒のものでは低い観測事実を理論的に初めて明らかにし、高く評価され、「温かい雨の降水機構の研究」により1961年には日本気象学会賞を受賞されました。また、黄砂や火山灰が自然氷晶核として有効であること、海塩粒子が巨大雲粒の形成と降雨の形成に重要であることを発見し、また、雲粒と氷晶の核形成、氷晶の結晶習性及び雲粒と氷晶の成長に関する研究は同人の門下生等によって更に発展し、それらの成果の重要性は現在、国内はもとより国外でも高く評価されています。特に、氷晶の結晶習性の理論は結晶学会などにおける必読の論文となっています。

先生は実験研究に基礎をおいて、自然大気中の降雨雪に関する物理・化学的測定・観測を北陸降雪地帯、尾鷲大台ヶ原多雨地帯で行うのみならず、国際共同観測事業についても積極的に取り組み、ハワイ島、アラスカ、シアトル等において日米共同観測事業を行い、雲物理及び降雨機構の研究等において多大の成果を挙げるとともに、降水機構の微物理学的研究の応用として、人工降水調節の研究を行い、地上及び航空機から

ヨウ化銀を撒き、人工的・自然降雨の識別できる雨水中の微量ヨウ化銀検出手法を開発し、群馬県山岳地帯、奥多摩地帯における実験の手掛かりを見出しました。これらの数々の研究成果は、雲物理学を基礎とした日本における人工降雨のパイオニア的研究として貴重なものです。

一方、先生は惑星大気の成因、水圏の存在の可能性、火星における二酸化炭素の形成の可能性などにいち早く注目し、地球大気と惑星大気の比較、惑星大気の気象を理論的に考察するとともに、二酸化炭素及びアンモニアなどの氷晶形成と結晶構造などを実験的に研究し、近年の惑星大気研究の糸口を開拓しました。

さらに、先生は大学院教育にも熱心で、ゼミなどでは曖昧な説明では許してもらえず、当番になると緊張からか腹痛などの体調不良を訴える者もいました。

先生はその顕著な研究業績と高い識見によって、学会活動等においても指導的な役割を果たし、日本気象学会理事（1970年～1975年）を務め、わが国の地球物理学及び気象学の振興と学会の発展に大きく貢献されました。

＜元愛知学院大学 権田武彦＞

先生との出会いは、私が名大大学院理学研究科水質科学研究施設に入学したときに始まります。先生は当時助教授で、私は先生の指導を受ける事になりました。先生は、「自然現象を理論的に研究する事が好きで、私は、研究費はあまり使いませんよ」、と言っておられました。そのためかどうかは分かりませんが、マスターコースでは、雨滴をサイズ別に分類して集める水平風洞と、1つの水滴を空気中に浮遊させる垂直風洞を設計され、製作されました。

ドクターコースでは、研究室の中心が雪の研究になって来たので、雪の結晶をつくる低温槽を作る事になりました。先生は、誰も手をつけていない研究をする事が好きで、当時から惑星大気の雪の研究に注目されておられました。そこで、私に炭酸ガスの雪とアンモニアの雪の結晶を作る様に、と言われた事があります。しかし私は、水の結晶を作るだけで手一杯であったので、水の結晶に拘っていたところ、先生は、ご自分で上記の結晶を作り、理論を入れて投稿されました。大学院に入学して5年後、私は千葉県野田市にある東京理科大学に勤める事になりました。それから数年後、先生は、野田市に隣接する柏市にある気象大学の教授として転勤されてきました。お互いの職場が

近くなったので、また学生時代に戻って、お互いに助け合う事になりました。私から先生には実験器具の一部をお貸しし、先生からは私の論文をチェックして頂きました。このときさすがに先生だと大変感心した事は、お邪魔したその場所で、鼻歌まじりの添削を始めた事です。

4. 気象庁時代

先生は1970年に気象大学校教授となられ、1976年には大阪管区気象台技術部長として転出されました。その後1978年には観測部測候課長として富士山レーダー更新の指揮をとり、1980年には企画課長として世界気象機関（WMO）の執行委員会や第二地区第7回総会に出席されました。1983年には札幌管区気象台長、1986年には観測部長としてWMOの大気科学委員会（1986年ソフィア）、第二地区第9回総会（1988年北京）、IPCC第2回会合（1989年ナイロビ）に出席されました。1990年10月に気象大学校長を最後に退職されました。

＜元気象庁 松原廣司＞

私をご指導いただいたのは、先生が名古屋大学から気象大学校に異動された1970年4月からになります。その後も折に触れ、特に、測候課長、観測部長に就任された際には、私の南極行きで多々ご指導いただきました。私事で恐縮ですが、私の気象大学校における卒業研究は先生のご指導を受けた「希土類元素の酸化物の氷晶核化能力」でした。卒業後、先生に勧められて気象集誌に投稿すべく取りかかりました。しかし私の英語力の問題もあって改稿が進まないため、先生のご自宅にお邪魔してご指導いただきました。この間、奥様からは美味しい料理に加え、しばしばお酒までいただき、良い気分で帰宅した記憶があります。結果、掲載までに2年を要し、「編集委員の藤原美幸さんが努力賞で掲載ですと言っていたよ」と、笑いながらおっしゃった先生のお顔を思い出します。

＜元気象庁 石原正仁＞

先生が名古屋大学から気象大学校に移ってこられた年に私は気象大学校に入学し、先生から4年間ご指導を受けました。気象学と大気物理学の授業では「若い人は講義にすぐに飽きますから、私の授業では理論・必読論文・自分の研究成果の3つを柱に、それらを交互に教えます」とおっしゃり、チョークが折れるほどの

速さで黒板いっぱい大きな字と精密な図をしたためるお姿に、大学教授の迫力を感じたものです。雪結晶の成長を計算機で再現する、木星の雲は下降気流内で作られるなどの講義は今でも記憶に残っています。そして先生は「まず始めること、始めたら終わること、終わったなら書くこと」というファラデーの言葉を学生にさりげなく伝えるとともに、ご自身も多くの研究論文を執筆され、さらに気象庁の部内誌などにもユニークで熟知に富んだ海外出張報告や随想などを残されています。

先生のお人柄に引かれて学生が連れ立って先生の宿舎にお伺いすることがありました。そのとき奥様が「観測船啓風丸の方からいただいた八丈島のおみやげです」とおっしゃりながら、大きなポリタンクから焼酎をポンプで各人のコップに豪快に注いで下さったことは、半世紀前の楽しい思い出です。

4学年の学生には卒業研究が与えられます。先生はご専門の氷晶核に関する理論や実験に関する研究をはじめとして、惑星大気に関する実験や植物発展にともなう地球規模の気候変動など、幅広くしかも学問的に高いレベルのテーマを学生に与え、研究の進め方、論文の書き方、さらに効果的な発表までを具体的に丁寧に指導して下さいました。

<元気象庁長官 立平良三>

気象大学校教授に着任された先生は、予報関係者の会合で、集中豪雨を雲物理学的に解釈する試みをよく話されました。予報側からの疑問点の指摘に窮しても、いかにも楽しそうに討論しておられたことは印象的でした。先生の観測部長への就任は、地球温暖化が注目され始めた時期であり、庁議でもよく議論されました。先生の自由闊達な発言は、議論の活性化に資することが大きかったと記憶しています。

<気象コンパス 古川武彦>

駒林部長のもとで仕事をしましたのは、私が管理課にいたわずか1年間でしたが、ずっと以前から日本気象学会でご一緒したことや「気象旧友会」の総会時などで数10年以上もお近くに感じていました。

部長は気象人には珍しい異色の人で、私は「駒林流」と評しています。万事に関心を持ち、熱心で、実践的、実証的でした。さらに社交的で、いつも笑顔を浮かべ、誰かが話をするとすぐフォローし、場が盛り上がりました。観測部内の風通しもよく、ソフトボール大会やバスをチャーターしての伊豆旅行など数々の楽しかつ

た思い出が浮かびます。

当時の管理課では仕事が終わった後にときどき懇親会があり、他の課からの飛び入りもあって、まさに談論風発でした。ある時、地球温暖化が話題となりました。すると部長は、傍の黒板に地球の外殻を描き、「もし、南極大陸の氷が全部融ければ、海面はこのように約60m上昇します…」と白墨が折れんばかりの筆致で、計算を書き進められたのを記憶しています。どんな席でも笑顔を絶やさない好漢でした。退庁後、時には有楽町のビヤホールに私たちと同行され、大きなテーブル上に全員が大ジョッキをずらりと並べたこともありました。

私は気象庁を辞した後、JICAによる技術協力プロジェクトでモンゴル気象水文環境監視庁(NAMHEM)に滞在しました。赴任するとすでにその前に部長が同様のプロジェクトで、モンゴル国立大学で教鞭をとっておられたこと、さらに首都ウランバートルで開かれた大ダンスパーティーに出席されていたことを知りました。60歳を優に超えて異国での授業とダンスと、まさに面目躍如の人でした。

部長は、その立ち振る舞いを通じて多くの人に「駒林流」を広めて来られました。今でも私の胸にはその薫陶が生きています。

5. 気象庁ご退職後

<元JWA, 元JICA 赤津邦夫>

先生は気象庁を退官された後、JWAにお出でになり、本部や地方本部の事業・管理部門の総括的な長としてご活躍されました。私もJICAの専門家として多くの国に滞在していましたが、この間の先生からの年賀状にはいつも、あの崩すことのないがっちりとした漢字で、途上国気象局の指導を頑張ってほしい旨の短文が添えられていました。先生はきっと海外での指導をもっと行いたかったのではないかと思います。

<JWA 飯田秀重>

先生は、私がJWAに入社した時の事業本部長として面接官のお一人でした。研修中に昼食や歓迎会にご出席していただきお話をする機会がありました。研究発表会では、総評ですべての発表者に対して、コメントをいただいたことが大変印象に残っています。新入職員に対しても丁寧に助言をいただいたことに感謝しています。

<ODA コンサルタント 井戸正治>

最近、先生のモンゴルでの JICA 専門家当時の NAMHEM 長官他と20年ぶりにウランバートルでお会いし、先生のお話を聞くことができました。夏に先生と郊外の避暑地にピクニックに行き、偶然隣合わせたグループが当時のモンゴル相撲の横綱と大関クラスの人達で、一緒に野営で石蒸し肉料理を作って楽しんだそうです。先生はその人達と相撲をとったのですかと尋ねましたが、いえいえ、いつも温厚な先生はにこやかにその人達とお話をされていましたよ、ということでした。

私の先生の一番の思い出は、 -30°C 以下にもなる極寒の冬のためにひざ下まである皮革のロングコートをおオーダーメイドされましたが、足がコートの裾に束縛されて自由に歩くことができず、勤務先の国立大学の玄関前の階段を運転手が抱きかかえるように下りられていた姿。今でもほのぼのと心に浮かんできます。

<名古屋大学 篠田雅人、明治大学 森永由紀>
2005年から2008年に、JICA「モンゴル国気象予測及

びデータ解析のための人材育成プロジェクト」により、NAMHEMで、ゾド（寒雪害）の早期警戒システムの構築に携わりました。これは、先生の担当された JICA プロジェクトの後継といえるものでした。先生が「天気」に執筆されたモンゴルに関する海外だよりが重要な指針となりました。NAMHEMのスタッフは辛口な人が揃っていましたが、駒林先生はその誰からも心から尊敬されている様子でした。

6. おわりに

先生はそこご功績により2001年に勲三等瑞宝章を受章されました。先生のご命日は奇しくも気象記念日である6月1日です。先生の気象各界への長年のご貢献に感謝するとともに、心よりご冥福をお祈りいたします。

気象庁の矢野俊彦氏、中本能久氏からは関連の資料をいただきました。感謝いたします。

(石原正仁・石坂 隆・権田武彦・松原廣司
立平良三・古川武彦・赤津邦夫・飯田秀重
井戸正治・篠田雅人・森永由紀)